

岐阜県山口市・慈明院の木造不動明王立像と 十五社神社大日堂の仏像について

見 田 隆 鑑

はじめに

筆者は令和元（2019）年11月から、岐阜県文化財エキスパートバンク事業に関わり、県内の市町村からの依頼を受けて仏像調査を実施している。この事業は、文化財の取扱いやその保存・活用、建造物・史跡等の整備について、指導助言できる有識者を県が把握して市町村に紹介する事業で、岐阜県庁の文化伝承課が窓口となり、市町村からの依頼は文化伝承課経由で文化財エキスパートとして登録している人物に届く形になっている。

本稿では、筆者がこれまで本事業を通して調査を実施した地域の仏像の中から、岐阜県山口市にある慈明院の木造不動明王立像と、同市の十五社神社大日堂の仏像について取り上げ、それらの基礎情報を報告するとともに、調査に基づく所見を記す¹⁾。

山口市は、平成15（2003）年に高富町、伊自良村、美山町の二町一村が合併して誕生した市で、市内には仏像彫刻では、県指定文化財1体、市指定文化財17体が文化財指定を受けており、そのうち平安時代の作例は3体があげられる。本稿で取り上げる仏像は全て未指定の作例であるが、平安時代後期に遡る作例を含んでおり、この地域における古代の宗教文化の姿を伝える貴重な作例と言える。

1. 慈明院の木造不動明王立像について

慈明院は、山口市西深瀬1722-1にある天台宗の寺院で、美濃における天台教学の重要な拠点（談義所）であった。『高富町史』に掲載される由緒によれば、慈明院は郷主永井定信が文和年中（1352～1356）に建立した寺院で、比叡山の僧直海を請じて開山とし、慈明院と名付けて田園を備え、文明年中（1469～1487）に齋藤持是院の執奏によって天台興国大圓禪寺の勅額を賜ったとされる。また、天文から天正にかけて数度の兵火に遭っており、慶長14（1609）年、天海の推挙によって朱印10石を受けたとされる。また、『高富町史』史料編に掲載される「慈明院由緒覚」（貞享3年）によると、慈明院は比叡山の末寺で、直海法印を開基とし、貞治2（1363）年から貞享3（1686）年まで324年（*史料には325年とする）法灯を継いできたが、開基時は神宮山慈明院と言い、文明年中、第4世の住持豪俊法印の時に後土御門天皇から天台興国大圓禪寺慈明院の称号を与えられたと伝える。この「慈明院由緒覚」には、続けて寺領安堵についても記録が残されている。

また、『高富町史』に収録されていない史料として、文和年中（1352～1356）から平成3（1991）年までの慈明院住持（開山直海から三十三世信善まで）の伝記が記される『住持記』（慈明院所蔵）が辻晶子氏によって報告されており、辻氏は慈明

院の歴史や寺領安堵などについても諸史料をもとに詳しく整理されている²⁾。

現在、慈明院に安置される仏像のうち、平安時代後期の聖観音菩薩立像【図版1～3】（山県市指定文化財）は、当初から慈明院に伝わるものではなく、岐阜県関市洞戸高賀の高賀神社境内にあった蓮華峯寺に祀られていた尊像であったことが伝えられている。このことは、先の『住持記』にも記述が見られ、この観音像は、寛保元（1741）年9月に聖徳太子が彫刻したという五尺余寸の聖観音を祀る観音堂（小沢観音）が焼け、尊像も焼けた為、再建にあたって高賀山から譲り受けたとされる。高賀山から観音像（智証大師の作の救世観音で、大きさは三尺余寸）をもたらししたのは、慈明院第22世の会海で、会海はこの像に彩色を施して、台座と光背を備えたとする。

本稿で取り上げる木造不動明王立像も平安時代後期の仏像であるが、慈明院の開基が南北朝時代の貞治2年（1363）と考えられることから、本像は慈明院開基以前の尊像ということになる。

以下、不動明王立像について情報を記述する。

木造不動明王立像【図版4～10】 一軀

（法量）

像高 47.5 cm 髪際高 33.6 cm
頭頂-顎下 10.3 cm
髪際-顎下（面長） 5.7 cm 面幅 5.4 cm
面奥 8.0 cm 耳張 7.3 cm
胸幅 9.4 cm 胸奥（中央）8.6 cm
腹奥 9.5 cm
肘張 19.2 cm 裾張 10.8 cm
足先開（外）8.5 cm （内）2.9 cm

（形状）

一面二臂の立像。頭頂に蓮花をあらわす。頭髪を巻髪として、左肩に緩く捻る辮髪をあらわし、垂下部を結って左肩に垂らす。面相は、額に皺を刻み、右眼を開き、左目を細く閉じ、口をへんの字に結び口元に牙をあらわす。三道相をあら

わす。着衣は、上半身に条帛（*正面の折り返し部分を三角形にあらわす）、下半身に裙と腰布を着ける。装身具は、臂釧、腕釧、足釧をあらわす。右手は屈臂して剣を執り、左手は垂下して羂索を握る。火焰光背をあらわし、岩座に立つ姿であらわされる。

（品質構造）

一木造、内刳なし、彫眼、古色。

頭体幹部一材、右手は肩、肘で矧ぎ、左手は肩で矧ぐ。両足先に別材を矧ぐ。

（保存状態）

両肩以下および両足先は後補とみられる。光背、台座も後補である。

現状、足柄の状態が悪く自立が不安定である。

（制作年代）

後補部を除く本像の頭体幹部は平安時代後期（12世紀）の作と考えられる。

本像は、厨子入り不動明王立像【図版11】の前立ちとして安置されているが、先の『住持記』には本像に該当しそうな尊像については特に記述がなく、その来歴は不明である。像高47.5 cmの尊像であることから、歴代住持が他所から持って来た尊像であった可能性も考えられる。

ただ、『住持記』の中に慈明院に安置された不動明王の彫刻や絵画に関する記述は見られ、①第2世隆俊の時代（応永の春頃）に護摩堂が建てられ、不動三尊像が安置されたこと、②第3世亮俊が寺に寄付したもののなかに明王関係では愛染像大小二幅、不動二幅（一幅は智証大師の筆、一幅は妙沢老人の筆）、五大尊があったこと、③第7世定賢の時に求め得たものの中に、不動（妙沢筆）が含まれるなど記録を確認することができる。①については彫像（不動明王二童子像か）と思われる。この不動三尊像は古像が安置されたのか新たに造立したものを安置したのか不明である為、古像であった場合、本像がその中尊であった可能性も皆無ではないが、一堂の本尊としてはやや大き

さが小さいように思われる。

『住持記』には仏像や仏画に関する記録も幾らか確認することができ〔資料1〕、今後の調査の中で現存する作例と対照させていくと有意義であろう。

また、慈明院が所蔵する聖教には、不動明王に関係するものとして、『護摩供行記（内題：不動明王護摩供持誦）』一帖〔宝永7（1710）年〕などが報告されている³⁾。

本像は図像的に極めて特徴的な要素があるわけではないが、条帛の正面折り返し部分が三角形にあらわされる点の一つの特徴として指摘できる。こうした表現は、葛川明王院の不動明王立像（平安時代・12世紀）や延暦寺所蔵（飯室不動堂伝来）の不動明王立像（鎌倉時代・13世紀）⁴⁾など、慈明院とも繋がりをもつ比叡山周辺の不動明王の作例にも見ることができる⁵⁾。

2. 十五社神社大日堂の仏像について

十五社神社は、山県市大桑2281番地にあり、天照皇大神など15座（20柱）の神々を祀る神社である。社伝では天長3（826）年⁶⁾の創建と伝えられ、天之常達立神と天神七代地神五代の神々が降り立ち、国内守護の為に当地に神社を祀るように命じたことがはじまりとされる。また、『美濃国神名帳』にある山県郡十二社のうち「正四位下 裁主明神」がこの神社にあたるという解釈もある。

鎌倉時代には、承久の乱の勲功で大桑郷の領主となった地方豪族逸見又太郎義重が神社を改修したと伝えられ、当時植栽した杉（樹齢800年、目通り5.2メートル）が「逸見杉」と名付けられて現在も境内に存在し、山県市指定重要文化財（天

〔資料1〕『神宮山慈明院住持記』に見る仏像、仏画の情報 ＊具体的な名称があがるもの

住持	彫刻	絵画
第2世隆俊	不動三尊像（護摩堂）	
第3世亮俊		胎金曼荼羅二幅（詫間法眼筆）、愛染像大小二幅 不動二幅（一幅：智証大師筆、一幅：妙沢老人筆） 五大尊、十六善神、千体阿弥陀（恵心筆）、種子阿彌（小川僧正筆） 十三仏、阿弥陀、普賢延命像二幅大小、観音曼荼羅
第4世豪俊	文殊像（文正元年、談義堂） 釈迦三尊、十六羅漢像（講堂） 安阿弥所造阿弥陀	
第5世豪憲	慈恵大師像（仏近兵部卿、永正三年九月）	摩多羅神像（画工豪運法師）
第7世定賢		両界曼荼羅二幅、種子曼荼羅、両界曼荼羅、十三仏、八髪（髻か）文殊 不動（妙沢筆）、毘沙門（弘法筆）、荒神（智証筆）、山王大師 天台大師、伝教大師、慈覚大師、慈恵大師
第21世快休	文殊菩薩像（安阿弥作、仏殿本尊）の修理（正徳四年夏）	
第22世会海	高賀山より智証大師作の救世観音（三尺余寸）を小沢観音堂にもたらす。彩色を施し、台座と光背を備える。 伽羅陀山石地藏菩薩（明和八年七月二十四日）	涅槃図一幅（縦：一丈三尺余、横：九尺） 八大菩薩、中尊、諸天、長者の図像で極彩色のものを五十二類具足（元文五年）

* 住持記には各住持の時に行われた堂舎の建立、修繕の情報や、経典の書写、石塔の建立などの情報も記されるが、ここでは仏像・仏画について情報を記すものを取り上げている。制作年月を記すものは合わせて表記した。

然物)になっている。

また、室町時代に大桑城主になった土岐頼芸(1501-1582)は、本殿を改修し、石清水八幡宮を勧請、合祀して「十五社大権現」と改称して土岐氏の氏神として崇敬したとされる。土岐氏関係の資料としては、天文9(1540)年に土岐氏が奉納した越前産笏谷石製の狛犬一对(山県市指定重要文化財)が現存する。

また、元禄14(1701)年にも本殿が改修されており、本殿内陣の柱に墨書銘が残されている。文化9(1812)年には岩倉具選により十五社大神宮と改称され、明治維新後には現在の社名である十五社神社に改称し、明治5(1872)年に村社となり、昭和19(1944)年に郷社に昇格、昭和54(1979)年には金幣社に指定されている。

十五社神社の大日堂は、享保4(1719)年の建立と伝えられるが、令和5(2023)年に十五社神社創建1200年奉祝記念事業の一環として改築がなされた。筆者はこの改築にあたり事前に堂内の尊像についての調査依頼を受けた⁷⁾。

筆者の調査時は、再建前の大日堂【図版12、13】で、堂内正面向かって左から釈迦如来坐像、阿弥陀如来坐像、毘沙門天立像、大日如来坐像、聖観音菩薩立像、薬師如来坐像の順で6体の仏像が安置されており、小型の弁財天坐像は大日如来坐像の下あたりに置かれていた(【図版59～61】参照)。木造如来坐像(部分)については、堂内には祀られておらず、薄様に包まれた状態で木箱に保管されていたものを大日堂内で拝見した。以下、調査時の安置順に各像の基礎情報と所見を記述する。

(1)木造釈迦如来坐像【図版14～20】

(法量)

像高31.0 cm 髪際高27.5 cm
頭頂-顎下10.8 cm 髪際-顎下6.5 cm
面幅6.9 cm 面奥7.9 cm 耳張7.9 cm
胸奥(右)7.5 cm(左)7.5 cm 腹奥9.7 cm

肘張9.3 cm 膝張24.5 cm

膝高(右)4.8 cm(左)4.3 cm 膝奥17.0 cm
裳先奥19.8 cm 光背高38.6 cm
台座幅37.4 cm 台座高18.5 cm

(形状)

肉髻相、螺髪、肉髻珠、白毫相をあらわす。耳朶環状(貫通)。

三道相をあらわす。衲衣を偏袒右肩に着け、腹前で法界定印を結び、蓮華座上に結跏趺坐する。光背は頭光(円光)をあらわす。

台座(蓮華座)は受花、敷茄子、反花、框からなる。

(品質構造)

木造(ヒノキ材、寄木造か)、漆箔、彩色。玉眼嵌入。内刳あり。像底に底板を貼る。

肉髻珠は木製、白毫相は水晶製。

*構造の詳細は像内を観察できない為、未詳。
頭部は両耳後ろを通る線で材を矧ぐようである。

(保存状態)

漆箔、彩色後補。

像底部に角枘(後補)が釘で取り付けられるが、現状ははずれた状態である。

(所見)

制作年代は江戸時代と考えられる。現在の光背と台座は阿弥陀如来坐像と同じもので、この光背と台座が制作された際は、釈迦如来坐像と阿弥陀如来坐像は一具として捉えられた可能性がある。像底部の角枘および台座に穿たれた枘穴は台座制作当初のものではなく、後から行われた作業である。

(2)木造阿弥陀如来坐像【図版21～27】

(法量)

像高30.7 cm 髪際高26.5 cm
頭頂-顎下10.6 cm 髪際-顎下6.3 cm
面幅6.9 cm 面奥8.3 cm 耳張8.4 cm
胸奥(右)8.7 cm(左)8.8 cm 腹奥10.5 cm
肘張19.8 cm 膝張27.1 cm

膝高(右) 5.0 cm (左) 4.8 cm 膝奥 16.4 cm
袈先奥 20.6 cm

台座幅 37.4 cm 台座高 18.0 cm

(形状)

肉髻相、螺髪、肉髻珠、白毫相をあらわす。耳朶環状(貫通)。

三道相をあらわす。衲衣を偏袒右肩に着け、腹前で弥陀定印を結び、蓮華座上に結跏趺坐する。光背は頭光(円光)をあらわす。

台座(蓮華座)は受花、敷茄子、反花、框からなる。

(品質構造)

木造(ヒノキ材、寄木造か)、漆箔、彩色。玉眼嵌入、内刳あり、像底に底板を貼る。

肉髻珠は木製、白毫相は水晶製。

*構造の詳細は像内を観察できない為、未詳。

(保存状態)

漆箔、彩色後補。肉髻珠、後補。像底部に角枘(後補)が釘で取り付けられる。

(所見)

過去の調査で、本像の制作年代は鎌倉時代とされているが、像底に底板が貼られ、像内の木質などが判断できない為、鎌倉時代後期頃の可能性もあるが、桃山～江戸初期くらいの可能性もあるように思われる。像底に貼られた板材が後補ではなく当初からのものであるならば、材は新しく見える。

釈迦如来坐像よりは時代が古く、同時に制作された尊像ではなさそうである。ただ、現在の光背と台座は釈迦如来坐像と同じもので、この光背と台座が制作された際は、釈迦如来坐像と阿弥陀如来坐像は一具として捉えられた可能性がある。

像底部の角枘および台座に穿たれた枘穴は台座制作当初のものではなく、後から行われた作業である。

(3)木造毘沙門天立像【図版28～34】

(法量)

総高(本体、台座) 94.5 cm 像高 80.3 cm

髪際高 71.5 cm

頭頂-顎下 19.0 cm 髪際-顎下 11.0 cm

面幅 9.5 cm 面奥 14.1 cm

胸奥(右) 13.5 cm (左) 13.3 cm 腹奥 18.7 cm

裾張 23.5 cm 台座高 14.2 cm

右足枘高 3.5 cm 左足枘高 4.0 cm

(形状)

頂部に宝珠をあらわす兜を被る。眉間に皺を寄せ、両目を開き、口を閉ざす。耳は耳朶のみあらわす。広袖衣、鱗袖衣、袴を着け、肩当て、肩甲、胸甲、腰甲、前盾、籠手、脛甲を身に着け、腹部に帶喰をあらわす。天衣を着ける。右手は腰脇で宝棒を執り(現状は手首先を欠損)、左手は肩前あたりで宝塔を掲げる。杳を履き、邪鬼の上に立つ。邪鬼の下に岩座をあらわす。

(品質構造)

木造(ヒノキ材、一木造か)、彩色(古色)。彫眼。内刳あり。

(保存状態)

彩色後補。頭部後補。兜前面の飾りは紙製(後補)。左右の鱗袖部欠失。右手首先欠損。両肩以下後補。天衣遊離部後補。両足先(二材)後補。背面腰部の光背受け後補。邪鬼、岩座後補。本体の複数の箇所には釘での補修が見られる。
*台座邪鬼の部材が膠の劣化によりはずれかけている(特に前面材)。台座(岩座)の部材もはずれた状態で保管されている。
*今回の調査時に毘沙門天立像の部材をはじめ、床に転がった状態の部材については散逸を避ける為、箱にまとめて保管する形とした。

(所見)

体幹部の制作年代は平安時代後期と見られる。

薬師如来坐像、聖観音菩薩立像と同時期に修理がなされているか。

尊名については現状の姿をもとに毘沙門天と

しているが、当初部は体幹部のみの為、毘沙門天以外の武装天部像である可能性もあるかもしれない。

(4)木造大日如来坐像 【図版 35 ～ 42】

(法量)

像高 84.0 cm 髪際高 63.9 cm
頭頂-顎下 35.0 cm 髪際-顎下 16.7 cm
面幅 14.5 cm 面奥 20.6 cm 耳張 18.5 cm
胸奥（右）19.3 cm（左）19.3 cm 腹奥 23.4 cm
肘張 42.6 cm 膝張 57.0 cm
膝高（右）10.7 cm（左）10.9 cm 膝奥 43.4 cm
裳先奥 50.6 cm

(形状)

五仏宝冠（笄、冠繪をあらわす）を被る。宝髻、白毫相をあらわす。耳朵環状（貫通）。三道相をあらわす。天衣、条帛、腰布、裙を身に着ける。胸飾（別製）、臂釧、釧を着ける。両手は胸前で智拳印を結び、両脚を結跏趺坐して蓮華座上に坐る。光背は頭光（円光）をあらわす。台座（蓮華座）は、受花、反花、框（二段）からなる。

(品質構造)

木造（寄木造）、漆箔、彩色。彫眼。内刳あり。像底に底板を貼る。

宝冠、瓔珞は別製。

*構造の詳細は像内を観察できない為、未詳。

(保存状態)

宝冠は五仏（絵画）を嵌めて五仏宝冠をあらわしているが、現状は二尊（阿弥陀如来と不空成就如来か）が欠失している。

瓔珞は一部欠失する。両腕にかかる天衣は膠で左右の腕に接着されていたようだが、現状は天衣の部材を載せているだけの状態である。

(所見)

制作年代は江戸時代と考えられる。大日堂の建立は、享保 4（1719）年とされることからこの頃の制作か。

(5)木造聖観音菩薩立像 【図版 43 ～ 48】

(法量)

像高 101.5 cm 髪際高 91.0 cm
頭頂-顎下 21.7 cm 髪際-顎下 11.3 cm
面幅 10.5 cm 面奥 14.4 cm 耳張 14.0 cm
胸奥（右）13.2 cm（左）13.7 cm 腹奥 14.9 cm
肘張 33.0 cm 裾張（現状）20.2 cm
足先開（内）13.3 cm（外）20.0 cm
足柄高 6.0 cm 足柄幅 12.0 cm 足柄奥 3.8 cm

(形状)

宝髻、冠繪をあらわす。耳朵環状不貫。三道相をあらわす。

天衣、条帛、腰布、裙を着け、腕釧を着ける。右手は胸前で印相（親指と人差し指を捻じ、余指を伸ばすか）をあらわし、左手は腹前で未敷蓮華を執る。左に腰を捻り、左足を軸足とし、右足を少し曲げて蓮華座上に立つ。

(品質構造)

木造（ヒノキ材、一木造）、彩色（古色）。彫眼。内刳なし。頭体幹部は一材より彫出し、両肩以下、両足先に別材を矧ぐ。冠繪、天衣遊離部も別材。

(保存状態)

彩色後補。両肩以下、背面裾裾部、両足先、冠繪、天衣遊離部は後補。

光背・台座後補。右手中指先、薬指先を欠失。

頭体幹部にも彫り直しがあるか。

現在の足柄も後補。

(所見)

修理を経て像の印象が変化しているが、頭体幹部（根幹部）の制作年代は平安時代後期と考えられる。薬師如来坐像、毘沙門天立像と同時期に修理がなされているか。

(6)木造薬師如来坐像 【図版 49 ～ 56】

(法量)

像高 88.0 cm 髪際高 77.0 cm
頭頂-顎下 28.7 cm 髪際-顎下 18.7 cm

面幅16.3 cm 面奥22.7 cm 耳張22.0 cm
 胸奥(右)22.2 cm (左)22.1 cm 腹奥28.1 cm
 肘張51.7 cm 膝張72.0 cm
 膝高(右)15.2 cm (左)15.0 cm
 膝奥44.0 cm 裳先奥54.5 cm

(形状)

肉髻相、螺髪、肉髻珠、白毫相をあらわす。耳朶環状不貫。

三道相をあらわす。衲衣を偏袒右肩に着け、右手は五指を伸ばす施無畏印をあらわし、左手は手前に差し出し、掌に薬壺を載せる。裳懸座上に結跏趺坐する。

光背は頭光(円光)をあらわす。

(品質構造)

木造(ヒノキ材、寄木造)、彩色(古色)。彫眼。頭体部は内刳あり、膝前部材は内刳なし。体部底面に底板を貼る為、像内の様子は観察できない状態である。

(保存状態)

右手中指先欠失。左手親指欠損。頭部、右肘先、右手首先、左袖口、左手首先、薬壺、膝前部材は後補。補修部や割れが生じた部分を中心に紙(反故紙)を貼ってその上から彩色を施す部分が見られる。

(銘文)

台座部分に墨書銘が残る⁸⁾。「薬師如来 壹鉢御再興細工人」

「濃洲岐阜大桑町 大佛師 野田與三八 御再興之ス 安永三年 己午 春 太吉日」

(己は甲の誤りか)

(所見)

体幹部のみ平安時代後期の可能性がある。頭部をはじめ後補部分は台座の修理銘に見られる安永3(1774)年の作業と思われる。聖観音菩薩立像、毘沙門天立像も同時期に修理が行われているか。

(7)木造弁財天坐像 【図版57】

像高9.0 cm

(形状)

頭上に宇賀神をあらわす八臂の弁財天坐像。荷葉座をあらわす台座に坐す。

(品質構造)

木造(ヒノキ材、一木造)、彩色(古色)。彫眼。内刳なし。頭体幹部、膝前を含めて一材から彫出。脇手は別材を矧ぐ。冠飾は別製。背面に光背の支柱を釘打ちする。

(保存状態)

本手の手首先欠失。右脇手3本、左脇手1本欠失。膝前部分割損。光背亡失。冠飾破損。

(所見)

制作年代は江戸時代と考えられる。

(8)木造如来坐像(部分) 【図版58】

体部前面材の一部、右肩から肘あたりまでの一部、膝前部材が残る。

膝前部材は時代が下る可能性があるが、その他は平安時代後期頃の仏像の一部か。

現状は薄様に包まれた状態で木箱に納められて保管されている。

大日堂の本尊として制作されたと考えられる大日如来坐像が、概ね大日堂の建立に合わせて制作された尊像と考えられ、その他の尊像は神社に伝来したものか、他所から合祀されたものかと捉えられる。

薬師如来坐像の台座内には安永3年(1774)の修理銘があり、その修理は大日堂建立(1719年)より半世紀以上後のこととなる。ただ薬師如来坐像、聖観音菩薩立像、毘沙門天立像の当初部分は平安時代後期に制作されたものと見られ、十五社神社に伝わる如来坐像(部分)も平安時代後期の仏像(如来坐像)の一部が見られることから、平安時代後期に制作された尊像が現在の十五社神社もしくはその周辺の寺堂に存在していたことが伺

える。これらが十五社神社に伝わるものであれば、当社の神宮寺の尊像である可能性も考えられる。

『高富町史』の十五社神社の項目には、天長4年に天神山恵解寺が建てられ、この寺は土岐頼純が大桑城を改築した際に現在の南泉寺の所に移し、瑞王山南泉寺と改めて、神社とともに厚く崇拝したと記している。

6体のうち、大日如来坐像は大日堂の本尊として制作されたものと捉えて問題ないと思われる。釈迦如来坐像と阿弥陀如来坐像は同時期に制作されたものではないと見られるが、像高も近いことから少なくとも現状の台座と光背が制作された段階では一具の尊像として祀られた可能性がある。また、薬師如来坐像、観音菩薩立像、毘沙門天立像には修理の際に同種のベンガラ彩色（古色）が施されていることから、これらはまとまりをもった尊像群であった可能性が考えられる。

十五社神社の仏像に関する記録には、『高富町史 史料編』に収録される「十五社宮御神灯料・御膳料等請取証文留」（加藤正直氏所蔵）に「一金壺両也 六反 山田菊右衛門 右は永代正五・九月御膳奉献キグアシウチコレアルナリ 大日如来 観世音 毘沙門 薬師如来 釈迦如来 弥陀如来 右六尊御膳奉献也 天明元丑年十二月ヨリ」の記述が見られる。この記事から天明元（1781）年には先の6尊がまとまった形で安置されていた可能性が伺える。また、この尊像の記述の順序についても当時の信仰形態を推測する手掛かりを含むものと考えられる。

先に見たように大日堂の建立が享保4（1719）年、台座の墨書銘から分かる薬師如来坐像の修理が安永3（1774）年であることから、薬師如来坐像修理後に6尊が供養されている様子が伺え、当時は恐らく6尊はみな大日堂に安置されていたのではないかと考えられる。また、大日堂の工事（建築）に関しては、「大日堂普請入用請取証文」（加藤正直氏所蔵・享保2〔1717〕年9月）が残り、『高富町史 史料編』に収録されている。

大正7（1918）年発行の『美濃国山縣郡志』の十五社神社の事項には、〔宝物〕として「十五社大神宮額一面、従三位具選書 駒犬二對（丈七寸石像丈四寸石造）、薬師如来の像」という記述のみが見られる。現在も残る扁額と石造狛犬に続けて仏像では「薬師如来の像」のみが上げられているが、大正期に薬師如来以外の五尊がどのような扱いであったのか気にかかる。ここに記す「薬師如来の像」が大日堂に安置される薬師如来坐像（6）を指すのではなく、現在、部分が残る如来坐像（8）を指すものであれば、神社に関わる仏像と大日堂に関わる仏像群を分けて捉えていた可能性も考えられるかもしれない。

いずれにしても、神社における仏像の記録は、現状は近世文書に見られる情報に限られており、各尊像の制作背景に関する具体的な考察は困難である。坐像については、どの尊像も底板がある為に像内の観察ができず、銘文等の確認はできなかったが、薬師如来坐像については台座裏から安永3年（1774）の修理銘が確認できたのは一つの成果と言える。像内の情報については、今後の解体修理等の機会に何らかの発見があることを期待したい。

大日堂安置の仏像のうち、平安時代後期の尊像（如来坐像2体、菩薩立像1体、武装天部立像1体）については、保存状態も良好とは言えないかもしれないが、修理を経てその当初部が部分的でも残されている点は意義あることと言える。

おわりに

以上、岐阜県山県市にある慈明院に伝わる木造不動明王立像と、十五社神社大日堂の仏像群について実地調査に基づく基礎データを報告するとともに、可能な範囲で所見を記した。

現在の山県市内の平安時代の作例としては、南泉寺所蔵の木造十一面観音菩薩立像（旧・美山町、

観音堂像)、長滝自治会所蔵の木造虚空蔵菩薩坐像、慈明院の木造十一面観音菩薩立像(旧・高賀神社境内の蓮華峯寺像)があげられ⁹⁾、鎌倉時代の作例としては個人蔵の薬師三尊像が市指定文化財となっているが、残りは室町～江戸時代の作例である。この地域は、白山信仰や高賀山信仰の影響とともに、比叡山からの影響などを背景に宗教文化が形成されている可能性があり、今後も継続的な調査を行うことで、古代から中世に遡る作例を見出すことができる地域と考えられ、新たな作例の確認とその保護が期待される。

本稿で取り上げた作品は文化財指定は未指定ではあるが、今後の文化財指定の有無に関わらず、各尊像が当該地域の歴史や文化を伝える貴重な遺例であることには変わりなく、地域の中で今後も大切に守り伝えられて行くことが期待される。

筆者が近年関わっている仏像調査では、今回の十五社神社の薬師如来坐像、観音菩薩立像、毘沙門天立像のように根幹部は古い作例でも、その後の修理等によって像容が変わっているものや、過去に某時代の作と所見が出ていても、観察に基づく図像面、様式面からの判断では制作年代の判断に迷うような作品について所見を求められる機会が多く、文化財保存活用地域計画の策定等に向けて各地域で文化財の掘り起こしが行われる中で、これまで保留とされてきたような仏像の価値判断に地域の文化財担当部署の意識が向けられるようになってきているような印象を受ける。

「地域」¹⁰⁾という視点で捉えた場合、どのような仏像も、またどの時代の仏像も、その地域の歴史や文化を伝える遺例であることには変わりなく、美術史的な観点から単に資料的に優れた作品を見つけ出して文化財指定をして守っていくという方法だけでは守ることが難しい尊像が存在し、寧ろそのような作品の方が多いのが現実の姿とも感じられる。特に江戸時代から近代の作品も保護する対象としていくことになると思うべき対象は大幅に増すことになるだろう。そうした尊像

を含めて、地域に残されている仏像をどのような形で守り、伝えていくのか、今後の文化財保存活用地域計画の策定やその計画の遂行の中で、こうした課題についても何らかの指針や解決策が見出されていくことが期待される。

注

- 1) 慈明院の調査は2020年9月30日に、十五社神社大日堂の調査は2022年10月15日に実施した。慈明院の調査では山県市教育委員会生涯学習課の矢島睦美氏、高木晃氏、長屋和幸氏、岐阜県庁文化伝承課宮川和文氏に、十五社神社の調査では山県市教育委員会生涯学習課の矢島睦美氏、長屋和幸氏、岐阜県庁文化伝承課の可見奈緒美氏にご協力を賜りました。また、『神宮山慈明院住持記』および『天台宗神宮山 慈明院聖教目録稿』の資料の閲覧については、慈明院・秋山法堂氏にご高配を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。
- 2) 辻晶子「岐阜県山県市神宮山慈明院の歴史と『住持記』」(『人間文化研究科年報 32』(2017)、辻晶子『神宮山慈明院住持記』(私家版、2016)。
- 3) 千本英史、龍池玲奈、辻晶子「慈明院聖教目録稿」(『奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻日本アジア文化情報学講座』(2011)、『天台宗神宮山 慈明院聖教目録稿』(天台宗神宮山慈明院、2011)。
- 4) 『企画展 比叡山麓の仏像』(大津市歴史博物館、平成15年) p. 37、52参照。
- 5) 立像の不動明王で、条帛の条帛の正面折り返し部分を三角形にあらわす作例には、東京・横山記念美術館所蔵像、福井・円照寺像、福井・大谷寺像、静岡・摩訶耶寺像、三重・大聖院像、三重・無動寺像、京都・放生院像、兵庫・光久寺像、和歌山・釈迦文院像、和歌山・金剛三昧院像、鳥取・長楽寺像、福岡・鎮国寺像、和歌山・金剛峯寺像(合体不動)などがある。
- 6) 山県郡志には天長4年とする。
- 7) 大日堂は2023年8月末に改築が終わり、2023年10月8日に竣工奉祝祭が行われ、仏像の特別拝観も行われている。堂の改築に合わせて仏像も修理が行われ、現在の保存状態については筆者が調査した時の状態とは変わっている。本稿掲載の写真は修理前の姿を記録したものである。
- 8) 墨書銘の判読にあたっては豊田市史編さん室(現・中京大学教務センター 古文書室)杉浦綾子氏にご協力を賜りました。
- 9) 南泉寺所蔵の十一面観音菩薩立像は旧美山町の観音堂像で、長滝自治会所蔵の虚空蔵菩薩坐像も旧伊自良村の尊像、慈明院の聖観音菩薩立像は高賀神社から移座してきた尊像であり、旧高富町の仏像としては平安期の尊像がこれまで取り上げられていなかったが、今回の調査で旧高富町にも平安期の作例を再確認することができた。
- 10) 地域という概念も、その捉え方で解釈が様々であると考えられるが、文化財保存活用地域計画の策定という点では、いわゆる現時点の行政区の中でのという話になるだろう。ただし、地域の文化を考える際には行政区をはなれ

た視点で捉える必要があることも考えなければならない。

〔付記〕

本稿で掲載した図版はすべて筆者調査時に撮影したものである。



【図版1】 木造聖観音菩薩立像（部分）



【図版2】



【図版3】



【図版4】 木造不動明王立像



【図版5】



【図版6】



【図版7】



【図版8】



【図版9】



【図版10】



【図版11】 木造不動明王立像（厨子入り）



【図版12】 再建前の大日堂（令和4年10月15日撮影）



【図版13】 再建前の大日堂（令和4年10月15日撮影）



【図版 14】 木造釈迦如来坐像



【図版 15】



【図版 16】



【図版 17】



【図版18】



【図版19】



【図版20】 釈迦如来坐像（像底）



【図版21】 木造阿弥陀如来坐像



【図版22】



【図版23】



【図版24】



【図版25】



【図版26】



【図版27】 木造阿弥陀如来坐像（像底）



【図版28】 木造毘沙門天立像



【図版29】



【図版30】



【図版31】



【図版32】 毘沙門天立像の台座（邪鬼）



【図版33】 毘沙門天立像の足衤



【図版34】 毘沙門天立像（頭部）



【図版35】 木造大日如来坐像



【図版36】 同・宝冠と天衣を外した状態



【図版37】



【図版38】



【図版 39】



【図版 40】



【図版 41】 木造大日如来坐像【像底】



【図版 42】 宝冠の仏像（大日如来）



【図版 43】 木造聖観音菩薩立像



【図版 44】



【図版 45】



【図版 46】



【図版47】 観音菩薩立像（像底）



【図版48】



【図版49】 木造薬師如来坐像



【図版50】



【図版51】



【図版52】



【図版 53】



【図版 54】 木造薬師如来坐像（像底）



【図版 55】 薬師如来・台座内の銘文



【図版 56】 薬師如来坐像の台座

薬師如来
老躰
御再興細工人

濃州岐阜大桑町
大佛師
野田與三八

安永三年

御再興之ス

己午春太吉日
(甲)

(図版 55 の台座の修理銘)



【図版57】 木造弃財天坐像（現状）



【図版58】 破損仏の部材



【図版59】 大日堂内の安置状況（調査時）釈迦如来、阿弥陀如来、毘沙門天



【図版60】 大日堂内の安置状況（調査時）大日如来



【図版61】 大日堂内の安置状況（調査時）観音菩薩、薬師如来